

白山ふるさと文学賞

第十回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 最優秀賞

ロイの告白 〽時を止めた男【スピンオフ】 〽

金沢大学附属中学校一年 服部 はっとり 柊真 しゅうま

「ハリット、ごめん！君に大変申し訳ないことをした。」

僕は謝り、そのまま顔を伏せた。幼馴染みのハリットに、これまでのことを全て告白した。ハリットは最後まで聞いてくれたものの、何も言わずに教室を去った。ハリットがどんな表情だったのか、僕は怖くて一度も顔を上げることができなかった。反応のなさに、僕たちの関係はこれで終わったと感じた。

僕、ロイ・ファゴット十四才。両親ともうじき十七才になる犬のハニーと暮らしている。ここは鳥のさえずりが何時も聞こえ、昆虫があちこちにいる自然豊かな町だ。樹々の中を通り、小川のほとりをハニーと散歩するのが僕の日課である。

ハニーは毛の長い大型犬。お母さんは時々僕に、「ハニーはロイより先にこの家にいるから、あなたよりこの家のことをよく知っている」とか、「あなたよりお姉さんなんだからね」とやたら僕を年下扱いする。どんな意図があつて言っているのかよく分からない。確かにハニーは、僕が生まれる前の写真に両親と写っているし、僕も物心ついた時からハニーがそばにいることは当たり前になっている。大切な家族だ。

大切な家族だとより強く思うようになったのは、小学校の図書館でハンス・ウエルヘルム作の『ズーっと ずっと だいきだよ』という絵本を読んだからだ。まるで僕とハニーの話だと思った。主人公の男の子と犬のエルフィーは一緒に大きくなる。男の子が成長するにつれて、エルフィーはどんどん年老いていく。男の子はエルフィーに毎晩「ズーっと、だいきだよ」と告げる。でもある朝起きたらエルフィーは死んでいた、というお話。この絵本に出会ってから、動物の成長は人より早いこと、好きな気持ちを言葉で伝える大切さを知った。だから僕もハニーに「ズーっと、だいきだよ」って伝えるようにしている。特に最近は頻度を増して。それは、ハニーの調子が悪そうなので病院へ連れて行ったら、肺に悪性の腫瘍が見つかり、切除できる大きさではなく手の施しようがないとお医者さん

に言われたからだ。突然の宣告に、僕たち家族は泣くしかなかった。

それでもハニーは、ゆっくりなら散歩はできた。ゆっくりだと、いつもの散歩コースに新しい発見がある。よその家のガレージに入っている格好良い車を眺めたり、小川のほとりに咲いた春を知らせる黄色いプリムラの花に目をやったり。プリムラの花言葉は『青春のはじまりと悲しみ』ってお母さんが言ってたなあ。思い出しながら歩いていると、ハニーが草むらの匂いを嗅ぎ出した。何だろうと近づき見てみると、ストップウオッチだった。今時というよりアンティークというのだろうか、全体は銀色で文字盤はローマ数字。落とした人は困っているだろう。見つけやすいよう近くのベンチに置こうと拾い上げ、壊れていないか上部のボタンを押した。突然物音が消えた。ハニーに目をやると舌を出したまま止まっている。道行く車も、草木も、何もかも。止めたのは僕なのか？怖々とボタンを再び押すと、何事もなかったかのようにハニーは舌を出して僕に近づき、車は流れ、草木もそよそよと揺れている。安堵と同時に、大変なものを見つけたことに怖くなった。僕は持ち帰る度胸もなく、でも誰かに拾われるのも心配なので、草むらにタイムストップウオッチと思われるものを戻した。でも心の中では持ち主が現れませんようにと願っていた。匂いを嗅ぎごうとしているハニーを連れて、家に帰った。

次の日もまた次の日も、プリムラの咲く小川のほとりをゆっくり歩くハニーと散歩しつつ、心の中はタイムストップウオッチがどうなっているか気になって仕方なかった。良いのか悪いのか、持ち主は現れなかった。一週間が経ち、僕はタイムストップウオッチを持ち帰ることにした。この一週間、『時を止めたいたいことリスト』を考えていた。

- ① ゲームを思いっきりする
- ② バイキングで一日中食べまくる
- ③ テスト中、教科書を見て解く
- ④ 部活でゴールを決めまくる

僕はタイムストップウォッチを持ち帰った日から、『時を止めてほしいことリスト』を実行した。あいにく①だけは、ゲーム機も時と共に止まってしまい叶わなかった。でも、勉強や部活で、僕の成績は一気に上がった。ある時ハリットが、どうしてそんなに調子が良いのか聞いてきた。言えるわけもなく、にやけて返すしかなかった。

僕は好調な日が続いていたが、ハニーはどうとう散歩に行けなくなった。病気の宣告を受けてから、三週間が経った頃だった。

それから数日後、ハニーが動いていないことに気づいた。

「ハニー！ハニー！」

大声で呼び掛けたら、耳が少しだけ動いた。僕は慌ててタイムストップウォッチを持ってきて、時を止めた。時を止めたハニーは、死んでいるように見えて余計に怖くなった。無意味なタイムストップウォッチに僕は大きく泣きながら、再びボタンを押した。ハニーの温かい体を抱きしめ、僕は何度も呼び掛けた。動いていた耳は次第に動かなくなった。だけど体は温かい。生きているのか半信半疑のまま、しばらく抱き続けた。その後、両親が帰ってきて、ハニーは死んでいると聞かされた。僕たち家族は悲しんだ。僕はなかなか立ち直ることが出来なかった。そして、タイムストップウォッチの無力さに失望した。

あの日から、何をしても楽しくないし、タイムストップウォッチを使う気になれなかった。タイムストップウォッチのことをハリットに打ち明ければ、気持ち晴れるかもしれない、と考えてみたり。でも、僕が勉強や部活で不正をしていたことが分かってしまう。ならば、タイムストップウォッチをハリットのところに置いたらどうだろうか、きつと誰でも使い道は同じで、ハリットも僕と同じことをするだろう。そうすれば僕を責めることは出来ない。僕は彼を試すようなことをしてしまった。

それから数日経った放課後、教室に誰もいないことを確認し、タイムストップウォッチをハリットの机の上に置いた。そして、校門を出たハリットを追いかけ、宿題のプリントを持ち帰り忘れているとウソをつき、教室へ取りに戻らせた。僕はタイムストップウォッチが他の人を持って行かれていないか、ハリットは持ち帰ったのか心配で、その晩なかなか寝付けなかった。

翌日早めに学校へ行き、ハリットの机の上を見た。タイムストップウォッチはない。

「おはよう、ロイ。」

ハリットはいつもと変わらないように見える。1限目の社会のテストは何事もなく過ぎた。2限目は体育で、百メートル走のタイム測定だ。ハリットはついにタイムストップウォッチを使い、10秒05を記録した。おいおい、いきなりの中学生新記録、もつと怪しまれないように使えよ。その後も部活でゴールを何度も決めていた。

こうして短期間で急成長を遂げたハリットは、学校でカリスマ的存在になった。みんなに囲まれ勉強法やサッカーの上達法などを質問されている。答えに困った顔をしたハリットと目が合い、「ほどほどにね」と僕は心の中で言った。

もうすぐ夏休みだ。ハニーがいなくなって三ヶ月が経とうとしている。散歩をしなくなって三ヶ月、「ずーっと、だいすきだよ」と言わなくなつて三ヶ月。

一学期の終業式が終わり、教室ではまたもやハリットを囲み、夏休みは何をする？という話題で盛り上がっていた。僕は「夏期講習かな」と答えた。みんなには言えないけど、タイムストップウォッチを使わなくなったから、成績がものすごく下がっている。部活に青春を捧げるとか自由研究に打ち込むという友達もいた。意外とみんな計画的だ。楽しく

話していると、急にハリットが涙目になった。クラスで一番明るいロボルトが、

「夏休みにオレらと会えなくなるのがそんなに寂しいのか？」
とハリットをからかい、みんなを笑わせた。ハリット、君はもうこの状況に一杯一杯じゃないのか？

帰り道、気持ちはすでに夏休み。気分よく歩いていると、急にハリットが「忘れ物したから教室に戻る」と言うので、僕は何かあるのではと思ひ、こっそり後を追った。誰もいない教室に着くと、ハリットはカバンからタイムストップウォッチを取り出し、誰かの机に向かって放り投げた。

「カラン…」

虚しい音が、静かな教室に響き渡った。とうとうハリットはタイムストップウォッチを手放した。でも、そこに捨てたら誰かが拾ってしまう。もう打ち明けるしかない。

「ハリット、ごめん！君に大変申し訳ないことをした。」

驚いたハリットが僕を見た。僕は謝り、そのまま顔を伏せた。僕はハリットに、これまでのことを全て告白した。タイムストップウォッチを拾った経緯、自分が調子良かったのはこのストップウォッチのおかげであったこと、犬の死、ハリットに話せず机の上に置いたことなどを包み隠さず話した。

ハリットは最後まで聞いてくれたものの、何も言わずに教室を去った。ハリットがどんな表情だったのか、僕は怖くて一度も顔を上げることができなかった。反応のなさに、僕たちの関係はこれで終わったと感じた。ああ、嫌われた。犬も死に、ついには幼馴染みにも嫌われた。机に放り投げられたタイムストップウォッチを手にして、学校を出た。僕は久しぶりにハニーと散歩した道を歩き、小川のほとりの拾った場所へ静かに返した。プリムラの黄色い花は咲き終わっていた。花言葉は『青春のは

じまりと悲しみ』か、今の僕にぴったりだ。

ハリットから連絡がないまま、自分からもしないまま、ひと月が経った。夏休みもあと数日。ハニーの写真を眺めながら、「ずーっと、だいすきだよ」と言ってみた。これって自己満足なのかもしれない、と思えてきて、何が良いのか分からなくなった。電話の着信が鳴り驚いた。シューマンからだったから。

「もしもし…。」

「ロイ、久しぶり。僕、あの日からタイムストップウォッチの使い道をずっと考えていたんだ。今どこにある？」

「見つけた場所に戻した。」

「今から取りに行こう！」

僕たちは合流し、小川のほとりに向かった。草むらをかき分けたが、タイムストップウォッチは見当たらない。ハリットは残念そうに言った。「タイムストップウォッチの使い道をずっと考えていたんだ。例えば、ハニーのように手遅れと言われる悪性腫瘍も、その部分にだけタイムストップウォッチをあて、時間を戻す。すると腫瘍は小さくなり、切除出来る。僕は将来、タイムストップウォッチを解明し、物理と医学を融合させたいと思う。」

ハリットは僕のこと、ハニーのことをずっと考えてくれていた。嫌われてなんかいなかった。うれしいやらほっとしたやら、僕は格好悪くも涙が溢れた。

「ハリット、ありがとう。僕もハリットと一緒にストップウォッチを解明したい！」

ハリットの熱い思いに背中を押された僕は、その日から勉強し、当時の成績では合格が難しいと言われていた高校に二人で入った。大学は別々になったものの、僕らは物理学者になった。

物理学者として研究をして二十年。久しぶりにハリットから電話がかかってきた。

「やあロイ、久しぶり。タイムストップウォッチの研究は、はかどっているかい？」

「おうハリット。こっちは順調だ。」

「それは良かった。必ず解明して、世界を驚かせような！そうだ、ロイ。同級生で医者になったロベルトからの伝言。「手術の腕を日々磨いているから、早くタイムストップウォッチを完成させろよ」って。物理と医学の融合、何としても成功させよう。」

僕は最高の仲間を持っている。仲間にも伝えたい。

「ずーっと、ずっと、だいすきだよ。」

